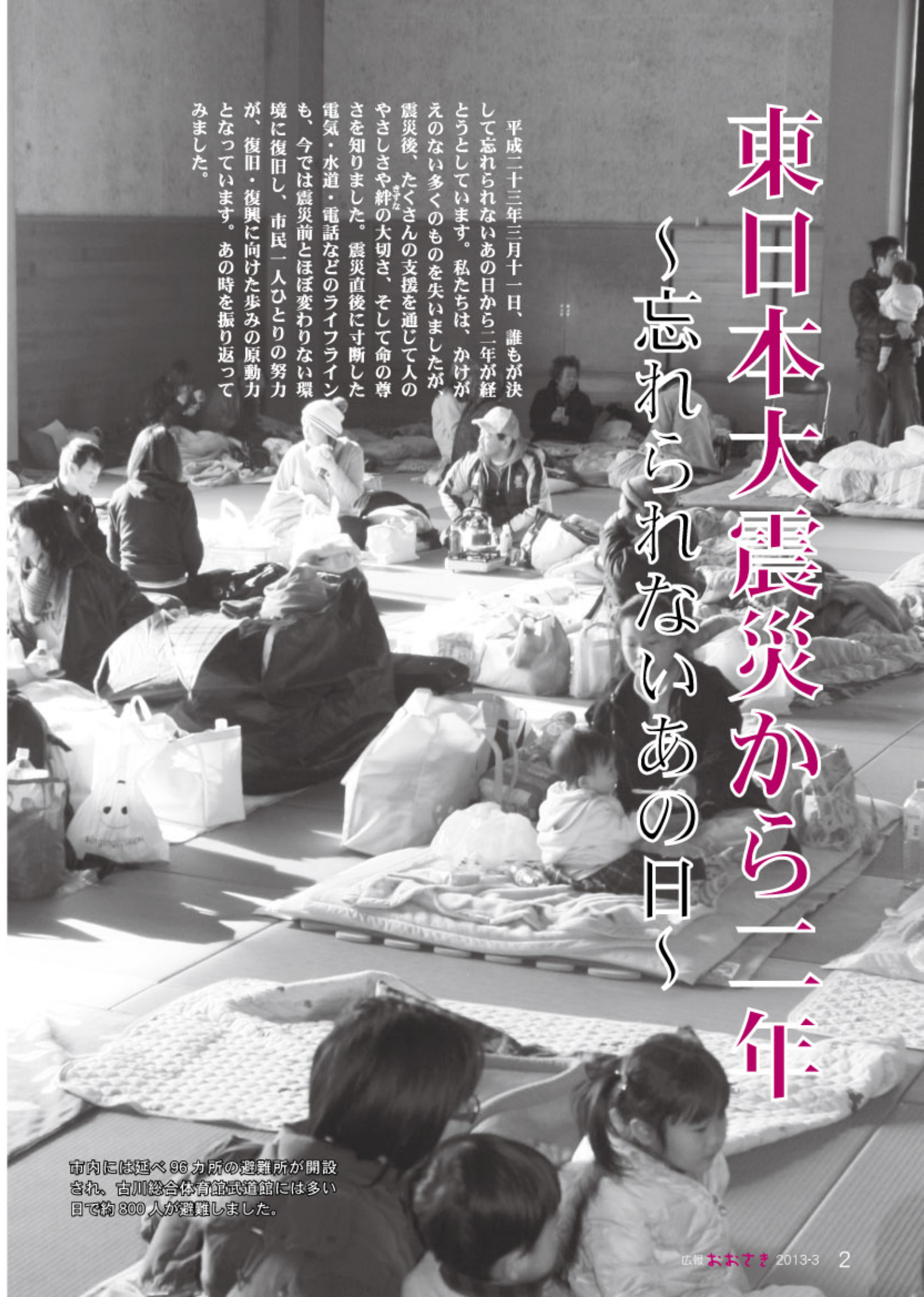


東日本大震災から二年

忘れられないあの日

平成二十三年三月十一日、誰もが決して忘れられないあの日から二年が経とうとしています。私たちは、かけがえのない多くのものを失いましたが、震災後、たくさんの方の支援を通じて人のやさしさや絆の大切さ、そして命の尊さを学びました。震災直後に寸断した電気・水道・電話などのライフラインも、今では震災前とほぼ変わりない環境に復旧し、市民一人ひとりの努力が、復旧・復興に向けた歩みの原動力となっています。あの時を振り返ってみましょう。



市内には延べ96カ所の避難所が開設され、古川総合体育館武道館には多い目で約800人が避難しました。

日ごろの近所付き合いのおかげ

牡鹿昇平さん

八十三歳



牡鹿さんは、15歳で全盲となり29歳からあん摩マッサージ指圧師、はり師およびきゅう師として現在も活躍中です。避難生活での様子を語っていただきました。

家から出られない
あの日は仕事も休みで昼寝をしていた時でした。

今まで経験したことのない大きな揺れで、上から物がバタバタと落ちてきました。外に出ようとしていましたが、玄関の下駄箱が倒れて出ることができずじっとしていました。

外から団地の人たちの声がざわざわと聞こえ、停電だという話も聞こえてきました。

しばらくして、近所の人々が声をかけてくれ、倒れた下駄箱を起こしてもらい、私はやっと外に出ることができ、古川総合体育館に避難しました。

その夜は、配布された毛布二枚で過ごすには寒かったのを覚えています。

慣れない生活
翌日には暖かい武道館に移動し、長い避難生活が始まりました。

私を気遣い、毎日のように自宅にお茶を飲みに来てくれていた友人と一緒に、避難所で過ごすことになりました。友人は弱視ですが、私の手をとり誘導してくれたので、避難所の間取りも少しずつ覚え、廊下の壁を伝ってやっと歩くことができました。

しかし、武道館の中はどこを歩いているのか迷ってしまい、横になって休んでいる人にぶつかり迷惑をかけてしまったこともありました。

体調の変化
避難所では、トイレに行くこと以外は歩くこともなかったため体力が衰えたのか、九日後、自宅に

戻った時には震災前のように体を動かすことができず、四月にはベットから落ちて骨折をしてしまいました。

私ができること
震災から一カ月後、県内の視覚障害者が集まり避難生活について話し合う機会がありました。障害を持つ人たちが災害時でも不便なく生活ができるように、行政などに伝えていくことが私のできることだと思いました。

皆さんの温かい心
毎日笑って話ができる近所の人、広報を点字や音声にして届けてくれる人、そしてヘルパーさんなど、皆さんに支えられていると改めて感じました。これからもずっと元気で過ごしたいと思います。

3.11 震災復興まちづくり講演

「着実に進む復興、市民とともに歩む復興」に向けての講演会を開催します。

◎ 政策課震災復興推進室 ☎ 23-2129

日時 3月11日(月) 13時15分～14時30分
場所 大崎合同庁舎5階会議室
演題 真の創造的復興の実現～内陸型復興モデルを目指して～
講師 宮城大学事業構想学部教授 風見 正三氏
(大崎市総合計画審議会会長、大崎市都市計画審議会会長、大崎市中心市街地復興まちづくり委員会委員長)
料金 無料
申込 3月7日(休)まで電話で申し込み

心を込め1分間の黙とうをささげましょう

3月11日(月)14時46分、東日本大震災で亡くなった皆さんに1分間の黙とうをささげましょう。